



社員の皆さん、ジメジメ梅雨の季節となり、ドライバーの皆さんにとっては、配送がしずらい時期かもしれません。

しかし、この時期は、私たちが普段口にしている、『お米』の本となる、田植えの時期でもあります。この時期に、しっかりと雨が降るから、私たちが食に困ることなく、健康に過ごすことができています。

また、体調管理が難しい時期でもありますので、体調を崩さないよう、日々の体調管理を、色彩的におこなっていただきたいと思います。

2か月ほど発行をさぼっていましたが、皆さんに情報提供をさせていただきますので、宜しくお願い致します😊

タイヤの点検を徹底しよう！！

タイヤの残り溝が1.6mm未満になると車検を通りませんので、当然交換するべきです。しかしそれ以上溝があっても、雨の続くこの季節には残り溝を意識しておくべきです。

一般的に新品タイヤは8mmの溝があります。タイヤ溝の大きな役割は排水機能ですが、これが減ってきて4mm未満になると、急に排水性能が落ちてくるというデータがあります。

湿潤時の制動距離を調べた実験では8mmから4mmまではほとんど変化がないものの、50%を下回る4mm未満では、急激に制動距離が低下しています。

このためタイヤ販売店などは、4mmを境に交換をすすめることが多いのです。

事業所では、どの段階でタイヤ交換をするかについて、経済的な判断理由があると思われませんが、タイヤの残り溝を運転者に計測させて、4mmを下回ったタイヤは制動距離などが長くなっていることを運転者に指導してください。

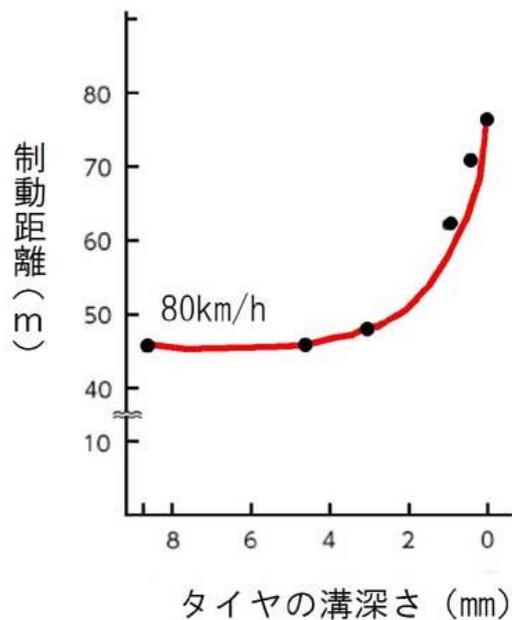
残り溝の少ない車に乗る場合、雨の日はより車間距離をとって早めに速度を落とす必要があること、ブレーキが効きにくいこと、カーブでスピードを出しすぎないことなど、運転時に気をつけるべきポイントを徹底しておきましょう。

空気圧の管理も重要

タイヤをみる上でもうひとつ重要な点は空気圧です。晴天であっても、タイヤの空気圧不足は燃費が低下するために問題ですが、雨天時は空気圧不足によりハイドロプレーニング現象などが起こりやすくなることを意識させましょう。

ハイドロプレーニング現象は、路面に溜まった水の量がタイヤの排水能力を超えた場合に発生しますので、もちろん4mm未満の残り溝のタイヤは危険です。

タイヤの溝深さと制動距離



空気圧不足では水を排水できなくなる

さらに、この現象が発生する速度が、負荷荷重とは無関係にタイヤの空気圧に関係するという研究があります。空気圧が下がるとタイヤと路面の接地面積が大きくなり、接地圧が低下するためにタイヤと路面の水を排水しきれなくなるため、より遅い速度でもハイドロプレーニング現象が発生しやすくなるのです。

つまり残り溝がある車でも、強い雨で路面の水分が多い場合、空気圧の低下がハイドロプレーニング現象発生の危険を招く恐れがあります。と、ブレーキが効きにくいこと、カーブでスピードを出しすぎないことなど、運転時に気をつけるべきポイントを徹底しておきましょう。

雨の日の安全運転に努めよう😊

太平洋では台風発生のニュースもあり、6月は多くの地域で梅雨入りとなりそうです。

雨の日は、車間距離の狭い状況での追突事故が多発したり、カーブでのスリップによる逸脱事故、強いブレーキを踏むことによるスピンなど、さまざまな危険が増えます。

また、視界が悪化することによる歩行者や自転車の発見の遅れから、交通事故が発生しやすくなっています。

車だけでなく、歩行者や自転車も同じです。歩行者が滑って車道側に転んだり、自転車がよろけるといった危険があります。

バイクも白線の上などでスリップしやすく、雨の日に大型車に接触して後部車輪に巻き込まれるといった事故が起こっています。

傘をさした歩行者などは安全確認が散漫になりやすい時期ですので、雨の日はとくに慎重に行動しましょう。

運転者として重視したいのは速度の抑制です。雨が振り始めたら速度を落とすことを心がけて事故を防ぐための余裕を手に入れましょう。

速度を落としておけば判断や操作に余裕が生まれ、スリップなどの危険も少なくなります。

子どもの自転車事故は、6月に最も多い！！

警察庁が2018年から2022年の期間に、児童・生徒（小中高生）が自転車に乗っていて死傷した事故を月別に分析したところ、1年間のうち最も多かったのが6月でした。

一つの要因として、4月から通学で自転車を使い始め、慣れた時期に安全運転がおろそかになっている可能性があると言及されています。

入学シーズンである4月の458人から増え始め、6月の591人がピークとなるまで右肩上がりに増え続けています。

とくに6月は高校生の事故が291人と多く、小中学生に比べても増加幅が大きくなっています。

6月の自転車事故増加は、雨による視界不良も関係している可能性があります。

少しぐらいの雨であれば、中高生はカッパを着て自転車通学をしますが、左右の視界が悪くなります。

また、傘をさして走行する場合は、視界が極端に悪くなるので、雨の日に自転車のこどもの姿を見かけたら、とくに注意してください。



雨で視界が悪くなった自転車に注意！



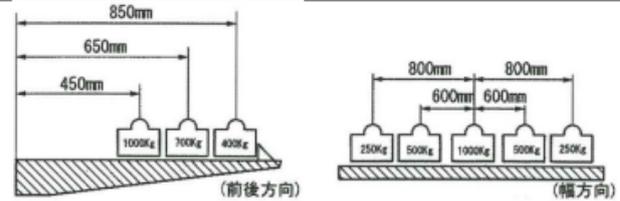
災害事例
と
その対策

テールゲートリフターの昇降板上から 荷とともに墜落…下敷きになり死亡

はじめに

本誌の冒頭でも紹介していますように、令和5年3月の労働安全衛生規則一部改正に伴い、テールゲートリフターを使用して荷を積み卸す作業については、特別教育の対象となりました。今回取り上げるのは、増加しているテールゲートリフターに関する労働災害の中でも、死亡災害に至った事例のひとつです。

この事例を見ながら、テールゲートリフターの危険性や注意すべき点を考えていきましょう。



今回の事例では、積込みを別の方法（例えばクレーンやフォークリフト等）で行った可能性があります。なぜなら、積込みの際には少なくともリフトがしなるような状態にはなっていなかったと推測されるからです。

もう一つは、被災者の作業位置です。荷の前方で荷を支える様にして後ずさりしていたと思われます。被災した時は、ゲートの先端付近に位置していたのでしょう。

5 再発防止対策について

事前に荷の重量を把握していたのであれば、この車両のテールゲートリフターでこの機械を荷卸しする計画はあり得ません。

再発を防止する観点から考えれば、

- (1) テールゲートリフターの能力、特性を熟知した上で、荷の重量や形状を確認する。（荷の形状や使用する台車等の種類により、昇降板に掛かる荷重の大きさや位置が変わります。）
- (2) キャスターストッパーを確実に使用する。（今回使用したハンドリフト等には、車輪のストッパーが無い場合もあるので、歯止め等で固定する。）
- (3) 荷台から昇降板上に荷を移動する際は、後ずさりは避ける。（この場合、後ずさりは大変危険です。キャスターストッパーにつまづくもしくは、キャスターストッパーを踏みつけて格納してしまうかもしれませんし、後ろ向きに墜落する危険性が非常に高まります。）

1 被災者：貨物自動車運転者

男性、58歳、経験年数30年

2 傷病の程度：多発損傷により死亡

3 災害発生状況

重さ約1.2 tの精密機械を4tトラックの荷台から降ろす作業を行っていた。

他の労働者がハンドリフトを操縦して精密機械を荷台からテールゲートリフターの上に移動させていた。この時被災者は精密機械を支えていた（補助）。精密機械がテールゲートリフターの上に載ったとき、テールゲートリフターがしなるような状態となり、被災者が精密機械とともに地上に落下し被災者は精密機械の下敷きとなった。

4 発生原因について

発生原因として挙げられているのは、「テールゲートリフターがしなるような状態になる重さの精密機械を、テールゲートリフターの上に載せたこと」です。まず、テールゲートリフターの最大荷重を考えてみましょう。

目で見てしなっているようであれば、当然のことながら、最大荷重を超えていることに間違いありません。

フォークリフトは、荷重中心の変化によって許容荷重が変化します。それと同様に、テールゲートリフターも、荷重の掛かる場所によって許容できる荷重が変化します。分かりやすく言うと、ゲートの先端に行けば行くほど、許容荷重が小さくなります。これは左右方向にも同様で、右端、左端に近づくほど能力が低下します。ゲートの根元では最大の積載能力があっても、先端や、左右端では能力が大幅に低下することを覚えておかなければなりません。

まとめ

本来、この作業には積卸し作業指揮者の選任が必要です。作業指揮者は、作業手順及び作業手順ごとの作業方法を決定し、作業を直接指揮しなければなりません。

最初にも書いたように、テールゲートリフターの操作の業務が特別教育の対象になりました。関係する作業員に対しては、遅滞なく特別教育を実施してください。

YouTube 動画

安全教育動画 カゴ台車の注意点！！



YouTube 動画

**放置厳禁！知らないと後悔する
脳梗塞の危険な症状とは？**



YouTube 動画

**【知らないと損する】脂質異常症
『悪玉コレステロール や 中性脂肪 が気になる方へ』**

